

平成二十五年 入学試験問題

国語

(第一回)

注 意

- 一、問題冊子と解答用紙が配られたら、まず**解答用紙の決められたところに受験番号、氏名**を書いてください。
- 二、試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないでください。
- 三、試験開始の合図があったら、問題冊子のページ数を確かめてから始めてください。
- 四、この問題冊子は、**十三ページ**あります。ページの不足や乱れがあったら、だまって手をあげてください。
- 五、印刷のはっきりしていないところがあったら、だまって手をあげてください。
- 六、試験終了の合図があったら、すぐに鉛筆を置いてください。
- 七、その後、解答用紙を集めますので、解答用紙を机の上に、表を上にして置いてください。
(問題冊子は持ち帰ってかまいません。)
- 八、国語の試験時間は**五十分間**です。(九時四十分を終了予定です。)

□ 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

（字数制限のある問いは全て句読点を含んで答えなさい。）

人間には、身体的なエネルギーだけではなく、心のエネルギーというものもある、と考え
ると、ものごとがよくA了解できるようである。同じ椅子に一時間坐っているにしても、
一人でぼーと坐っているのと、客の前で坐っているのでは疲れ方がまったく違う。身体
的には同じことをしていても「心」を使っていると、それだけ心のエネルギーを使用して
いるので疲れるのだ、と思われる。

このようなことは誰しもある程度知っていることである。そこで、人間はエネルギーの
節約に①ツトめることになる。仕事など必要なことに使うのは仕方ないとして、不必要な
ことに、心のエネルギーを使わないようにする、となってくると、人間が何となく無愛想
になってきて、生き方に潤いがなくなってくる。他人に会う度に、にこにこしていたり、
相手のことに気を使ったりするとエネルギーの浪費になるというわけである。ときに、役
所の窓口などに、このような省エネの見本のような人を見かけることがある。まったくも
って無愛想に、じゃまくさそうに応対をしているのである。そのくせ、疲れた顔をしたり
していると、B面白いところである。

これとは逆に、エネルギーがあり余っているのか、と思う人もある。仕事に熱心なだけ
ではなく、趣味においても大いに活躍している。他人に会うときも、いつも元気そうだし、
いろいろと心づかいをしてくれる。それでいて、それほど疲れているようではない。ア
人よりは元気そうである。

このような人たちを見ていると、人間には生まれつき、心のエネルギーを沢山もってい
る人と、少ない人とがあるのかな、と思わされる。いろいろな能力において、人間に差が
あるように、心のエネルギー量というのにも生まれつきの差があるのだろうか。これは大
問題なので、今回は取りあげないことにして、もう少し他のことを考えてみよう。

他との比較ではなくて、自分自身のことを考えてみよう。イ、自分が碁が好きだと
して、碁を打っているために使用される心のエネルギーを節約して、もう少し仕事の方に
向けようと考えてみるとしよう。そこで、友人と碁を打つ回数を少なくして、仕事に力を
入れようとして、果してうまくゆくだろうか。あるいは、今まで運動などまったくしな
かったのに、ふと友人に誘われてテニスをはじめると、それがなかなか面白い。だんだんと
熱心にテニスの練習に打ち込むようになる。そんなときに、仕事の方は、以前より能率が
悪くなっているだろうか。あんがい、以前と変わらないことが多い。テニスの練習のため
に、以前よりも朝一時間早く起きているのに、仕事をさぼるどころか、むしろ、仕事に対
しても意欲的になっている、というときもあるだろう。

ウ、ものごとには限度ということがあるから、趣味に力を入れれば入れるほど、仕
事もよく出来る、などと簡単には言えないが、ともかく、エネルギーの消耗を片方で押さ
えると、片方で多くなる、というような単純計算が成立しないことは了解されるであらう。
片方でエネルギーを②費やすことが、かえって他の方に用いられるエネルギーの量も増加
させる、というようなことさえある。

以上のことは、人間は「I」でもないし、「II」でもない、生きものである、という事実によっている。

人間の心のエネルギーは、多くの「鉱脈」のなかに埋もれていて、新しい鉱脈を掘り当てると、これまでとは異なるエネルギーが③キョウキュウされてくるようである。このような新しい鉱脈を掘り当てることなく、「手持ち」のエネルギーだけに頼ろうとするときは、確かに、それを何かに使用すると、その分だけどこかで節約しなければならない、という感じになるようである。

このように考えると、エネルギーの節約ばかり考えて、新しい鉱脈を掘り当ててのを④怠っている人は、IIIのようなことになってしまふ。あるいは、掘り

出されないエネルギーが、底の方で動くので、何となくイライラしていたり、時にエネルギーの暴発現象を起こしたりする。これは、いつも無愛想に、感情をめったに表に出さない人が、ちよつとしたことで、カッと怒ったりするような現象としてあらわれたりする。

自分のなかの新しい鉱脈をうまく掘り当ててゆくと、人よりは⑤ソウトウに多く動いていても、それほど疲れるものではない。それに、心のエネルギーはうまく流れると効率のいいものである。他人に対しても、心のエネルギーを節約しようとするよりも、むしろ、上手に流してゆこうとする方が、効率もよいし、そのことを通じて新しい鉱脈の発見に至ることもある。C心のエネルギーの出し惜しみは、結果的に損につながる人が多いものである。

（「こころの処方箋」 河合隼雄）

問一 傍線部A「了解」と同じづくりの熟語を次の中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 非常 イ 読書 ウ 早熟 エ 草花 オ 日没

問二 傍線部①～⑤のカタカナを漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問三 傍線部B「面白いところである」とありますが、どういう点でそう言えますか。四十字以内で答えなさい。

問四 空欄ア～ウに入る言葉を次の中から選びそれぞれ答えなさい。

① もちろん ② しかし ③ また ④ むしろ ⑤ たとえば

問五 空欄I、IIに当てはまる語句の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び記号で答えなさい。

① 趣味・仕事 ② もの・動物 ③ 神・仏
④ もの・機械 ⑤ エネルギー・節約

問六 空欄Ⅲに入ることわざをA群から、その意味をB群からそれぞれ選び記号で答えなさい。

【A群】

- ① 岡目八目
- ② 釈迦に説法
- ③ 猫に小判
- ④ 一寸先は闇
- ⑤ 宝の持ちぐされ

【B群】

- ① 先のことは予測できないこと。
- ② 十分に活用できないこと。
- ③ 外からの方が物の是非がわかること。
- ④ わからない人には何の価値もないこと。
- ⑤ 身近なことはかえってわからないこと。

問七 傍線部C「心のエネルギーの出し惜しみは、結果的に損につながる」とありますが、
どういう損につながりますか。文中の言葉を用いて簡潔に二つ答えなさい。

問八 筆者の考え方と一致するものには○を、一致しないものには×を解答欄に記入しなさい。全て○、あるいは×にしないけません。

- ① 心のエネルギーを使わないようにしていても疲れた様子をする人がいたり、他人に心のエネルギーを使っても元氣そうにしている人がいたりするので、心のエネルギー量に個人差があるのではないかという可能性を指摘している。

- ② 人の心には多くの「鉋脈」があつてその鉋脈から今までとは違うエネルギーが自然に出るので無理やり掘り起こす必要はないが、使用すると減るのでどこかで補充をしなくてはならないと主張している。

- ③ 心のエネルギーを日常的に使うと疲れるということは、一般的によく知られたことであるから、説明する必要性はなく、役所の窓口など公の場所でぶっくらぼうでそつけない態度をする人の気持ちは理解できると述べている。

- ④ 私たち人間は慢性的に疲労しているので、心のエネルギーのメカニズムについて科学的に分析し合理的に考えることによって、よりよい人間関係を築くことができる」と提案している。

- ⑤ 心のエネルギーというものは、使うことによって、むしろ他の方に用いられるエネルギー量を増加させることもあるので、無理に節約をするよりも上手に流していく方が効率もよいと述べている。

〔二〕 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

（字数制限のある問いは全て句読点を含んで答えなさい。）

船は筑紫の大津浦を出た最初の夜から、特に海上が荒れていたわけではなかったが、外海の大きな波浪に弄ばれて、Iのように揺れ動いた。船員を除いた殆ど全部の乗員がみな食物も喉を通らなくなり、ぐったりと死んだように横たわった。そしてそうした状態がその夜から何日も続いた。その中で（注1）普照だけは例外だった。初めの二日は人並みに苦しんだが、三日目には頭の痛みも胸のむかつきも取れ、正坐して船のかなり大きい動揺にも平気で身を①マカせていることができた。併し、他の三人の留学僧たちが、自分の傍で船暈に苦しんでいるのを朝から晩まで見ていることは、普照にとっても気持のいいことではなかった。

中でも（注2）栄叡が一番ひどくA傷めつけられていた。いつも口を半開きにして、そこから苦しそうな小さい呻き声を吐きづめに吐いていた。栄叡の眉の濃い目の鋭い顔は、またたく間に（注3）憔悴して、正面から眼を当てるのも気の毒な程だった。（注4）玄朗の方は死んだようになって、ものも言わなければ体も動かさなかった。

ある日、海上に夕闇が漂い始めようとする時刻であったが、普照は、ふいに一番向こうの席に横たわっている（注5）戒融から声をかけられた。

「何を考えている？」

これが、何となく太々しい②面構えと大入道のような感じの風貌を持った同僚からの、面と向かつて話しかけられた最初の言葉らしい言葉であった。乗船した時、姓名と生国を名乗り合っただけで、あとはお互いにすぐに船暈に取りつかれて、それぞれ孤独な闘いの

中に身を置いていたので、言葉を交わすような機会もないままに今まで過ぎていた。

普照は、仰向けに身を投げ出して眼玉だけこちらに向けている筑紫出身の僧の方に、

「Ⅱ」

と答えた。普照には初対面の時からこの大入道が、留学僧に選ばれる程の何ものかを持っている人物とは思えなかった。いかにも筑紫あたりの僧侶でも持ちそうな垢ぬけのしなものその風姿に付けているのが感じられた。

「俺は考えている」

戒融は言った。

「何を考えているのだ」

「人間の苦しみというものは、結局は自分自身しか解らないということだな。そしてそれは自分が自分で処理するしか仕方がないものだ、それよりほかにどうすることもできないものだということだな。俺はいま苦しんでいる。俺ばかりではない。栄叡も玄朗もみな苦しんでいる。併し、お前はいま苦しんでいない。運のいいことに苦しみから脱け出してしまっている」

Bなんと厭なことを言う奴だろうと、普照は思った。言われた通り普照はいま自分が、きびしく考えれば、誰の苦しみにも同情していないことを思った。気の毒には思っているが、それをどうしようもないし、どうしてやろうという気持もなかった。それにしてもそれを指摘されることは愉快なことではなかった。すると、そういう普照の心を見透してでもいるように戒融は語を③ツいだ。

「気を悪くするな。俺はただ本当のことを言っただけだ。俺とお前の立場が替わってれば、俺もまたお前と同じだ。人間とはそういうものだ」

そして戒融は、必ずしも普照に見せつけるためではなかったろうが、いきなり腹這いになると、もう一物もはいつていない胃の中から何ものかを（注6）吐瀉しようとした。そして、ああ、苦しい、と口に出して言った。

普照は玄朗という年若い僧侶とは、それでも時々口をきくことがあった。大抵船が烈しく揺れ始めた時だった。玄朗は自分の方からいつも口をきいた。いかにも何か喋っていることで気を④紛らせでもしているかのように、喋り出すと、その口調には一種の訴えともひとり言ともつかない、弱々しいが、併し、妙に熱っぽい調子があった。

「なに、これしき大丈夫だ。もう少しの辛抱だ。これで船が難破さえしなければ唐土へ着けるのだ。噂に聞いている長安の都も、洛陽の都も見られる。そこを歩き、そこでものを考えることができる。大慈恩寺も、安国寺も、西明寺も、この眼で見ることができののだ。そのどこかの寺で俺は学ぶことになるだろう。知るべきことはいっぱいある。読まなければならぬものも山程ある。何もかもこの眼で見、この耳で聞く。広い唐土の全部から俺は吸収すべきものは吸収してしまふ。もう少しだ。もう少しの辛抱だ」

聞いていると、C次第にその持つ妙に物悲しいものが、こちらの胸に伝わって来た。併し、確かにその言葉は、誰もが胸の奥に懐いている素朴なものに触れていた。ただそれは他の者の場合、確とは判らないが、何となく口に出すのを憚られるようなものであった。そんな時玄朗の顔は真蒼だった。玄朗の喋るのを、いつも誰も取りあわないで聞いていた。

勝手に喋らせておけといったところがあった。

併し、一度だけ戒融が聞きとがめて、そんな玄朗の言葉を遮ったことがあった。

「あまり夢みたいなことを言うな。船が無事に着くかどうかはまだ判っていないんだぞ」

止めを刺すような言い方だった。そんな時でも、栄叡の方は聞いているのかいないのか、

⑤シュウシ黙って、眼を空間の一点に当てたままで、相変わらず大きい息を口から吐き続けていた。

（「天平の薨」 井上 靖）

（注1）普照…大安寺の僧 留学僧 続日本紀に記録がある。

（注2）栄叡…興福寺の僧 留学僧 延暦僧録に記録がある。

（注3）憔悴…やせおとろえること。やつれること。

（注4）玄朗…戒融より二、三歳若い。紀州の僧。留学僧。

（注5）戒融…発航当日に大津浦から乗りこんできた筑紫の僧侶。普照と同年。留学僧。

（注6）吐瀉…吐くことと腹をくだすこと。

問一 空欄Ⅰに入る語句を次の中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 紙切れ イ 振り子 ウ 海藻 エ 小石 オ 木の葉

問二 傍線部①～⑤のカタカナを漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問三 傍線部A「傷めつけられていた」とありますが、どういふことか答えなさい。

問四 「Ⅱ」に入る言葉を次の中から選び記号で答えなさい。

ア 都に到着することだ

イ 私も苦しいのだ

ウ 何も考えていない

エ 誰も私のことを考えてはいない

オ どうしようもない

問五 傍線部B「なんと厭なことを言う奴だろうと、普照は思った」とありますが、どうしてですか。六十字以内で答えなさい。

問六 普照をはじめ四人は、どんな目的でどこに向かっているのか、答えなさい。

問七 傍線部C「次第にその持つ妙に物悲しいものが、こちらの胸に伝わって来た」とありますが「物悲しい」のはどうしてですか。その答えとして最も適切なものを次の中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 玄朗が口にすることに誰も関心を持っていなかったが、聞いているうちに予言めいたその言葉に運命を感じるようになったから。

イ 玄朗が感じている不安を周囲の者だれもが感じとっており、行き先もわからない船旅に諦めを感じているから。

ウ 玄朗は口では実現するかのように熱っぽく言っているが、実のところ将来への不安でいっぱい周囲の同情に気付いていないから。

エ 玄朗はあたかも辛抱すれば実現するかのように希望を語ることで恐怖を耐えようとしているが、それがかなえられるか分からないから。

オ 玄朗は周囲を励まそうと必死に前向きな発言をするが、怖がっているのがばれており健気さも時にしらししく思われたから。

問八 登場人物の説明について最も適切なものを次の中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 普照は、戒融に会った時から不吉なものを感じており、話しかけられることに警戒し、できるだけ話そうとしなかった。

イ 戒融は、もの怖じをしない性格で普照の内面を言いあてたり、他の僧に対しても認識の甘さを指摘したりする強さがある。

ウ 栄叡は、体が弱かったが周囲の会話に注意深く耳を傾け、特に普照と戒融の会

話には関心を持って黙っていた。

エ 玄朗はこの中で一番若く、今回の渡航には人一倍野望に満ちた夢を持っているが、慣れない船酔いですっかり意気消沈している。

オ 戒融は見かけは垢ぬけない大入道だが、ひどく船酔いに悩まされまったく症状のない普照を妬^{ねた}んで文句を言っている。

問九 この文章の特徴として最も適切なものを一つ選び記号で答えなさい。

ア 普照の視点を中心に、周囲の人物の言動や性格がこと細かに書き分けられており、これからの展開が予測される。

イ さりげない自然描写が文章のあちらこちらにちりばめられ、時間の経過を見事に表現している。

ウ 歴史的な事実をもとに淡々と表現しているので本当の話のような印象を与えることに成功している。

エ 漢字を多く用い、短い文を重ねることで歯切れのよさがある。また、古い話であることを印象づける効果も生んでいる。

オ 一人一人の言動や他者とのやりとりを具体的に表現することで、その人物の性格や考えが見え隠れしている。

問題は以上です。

受験番号	
氏名	

問

①

② やす

③

④ っ て

⑤

[illegible]

ア

イ

ウ

問六 A 群 B 群

問七

二
問
一

①

② え

③

④ らせ

⑤

問三

問四

[illegible]

問六

問七

問八

問九

